このまちに、住んでいて良かったと、感じる「瞬間（とき）」は？

温泉地として１２００年の歴史を刻み、
おおくの人々をぬくもりで、いやしてきた「和倉」
そんな歴史風土に育まれた環境で学び、育つ、
和倉小学校の子どもたち。
この地を訪れる人々に“ようこそ”という
気持ちを伝えたくて、
「まち中に落ちているゴミを拾い、かたづける。」
「道行く人に出会えば、誰にでも元気よくあいさつする。」
といった活動をしている。
そんな子どもたちの代表に、このまちに住んでいて
良かったと感じる瞬間を聴いてみた。

奥左から、高橋奈々さん、石多絵梨香さん、岡安遥月さん
手前左から、中田悠貴さん、土田悠人さん、中井一貴さん

まちの未来に期待と夢を持つ

七尾市長　**武元　文平**

まちの将来に期待や夢を持つことができなければ、そこに住む喜びを感じることはできません。

行政改革や財政健全化の取り組みにおいては、何が削られたという話題に目がいきがちで、まちの将来に失望を感じてしまうことがあります。

しかし、取り組みの本質は、自立したまちに生まれ変わるための新しいシステムづくりや従来の意識や行財政の構造を改革するといった前向きなことであり、むしろ明るい展望を持っていただきたいと思います。

来年度より、七尾市の未来図とその実現に向けた計画的、効果的な施策を具体化した「七尾市総合計画」の策定を進めます。

七尾市の礎を築く市民一人ひとりがまちの未来に期待と夢を持つことで、新しいまちを創り得ると確信しています。

新しいまちづくりには、市の現実と地域の価値や可能性を見つめ直すことも大切ではないでしょうか。

何もないではなく、見おとしていた地域の資源を掘り起こし、ともに活かす知恵と工夫を凝らしていきましょう。

「家でごはんを食べてるとき、自分って良いまちに住んでいるなぁって。だって新鮮で、おいしい魚が食べられるんだもの。」
遥月

「普通にまち中を歩いていて、ばったりテレビや雑誌で見かける有名な人に出会ったとき。住んでいるまちが、有名なとこで得したかも。」
絵梨香

「家から出て、すぐに花火大会を楽しめるとき、わざわざ遠くにでかけなくてもいいんだよ。しかも夏と冬に楽しめるの。これってぜいたくかも。」
奈々

「楽しいイベントがあるたびに思うよ、和倉って、にぎやかだよね。でも静かなときも良いんです。」
一貴

「人の親切に出会ったとき。僕のまちに住んでいる人って、聴いたら、なんでもこたえてくれる、とってもあったかい人ばかり、まるで家族みたい。」
悠人

「温泉に入っているとき。いつでも気軽に温泉を楽しめるって、このまちに住んでいるからできることなんだよね。」
悠貴

みなさんが普段の生活の中で、感じるまちの良さは、どんなことですか？一度、考えてみてください。